

対する責務が完了したと考えるところが多い。「経済市場が流動的だからこそ、責任のあるマネジメントを排出側も処理側も行っていかなければならない」とする。

一般廃棄物で言えば、市町村が市民を代行して廃棄物の処理を委託する

いるか、健全な経営を行っているかなどの多くの事項を確認した上で業者を選定を行うべきだが、そこまで徹底しているところは少ない。「それが国民にとって大きな損失となる」事態を招いている。

後々に負荷がかからぬ環境マネジメントを行

見ると、溶融、焼成など他の方法に比べて圧倒的に少ない。例えば燃料式の溶融では〇・8011トン排出するが、同社の方ではわずか〇・〇〇54トンにすぎない。

事業者が処理施設の外面  
上の取り繕った部分しか  
見ていない。それが不適  
正処理が横行する事態を  
招いている」とする。

る者が担うべき分野だが、必ずしもそうなつてはいないのが現状だ。排出側はよく理解しないまま、処理業者を選定し、処理側は再生品の安全性が不完全なまま再生し、トータルサビリティも不十分な状況だ。需要がなければ再び廃棄物になる。「排出

あるべき」だが、ほとんど存在しない。「主觀で判断を間違えた時に、どこまで市町村や企業の信頼度を損失するか、重く捉らなければならない」。同社の先行した取り組みは今後の真の循環型社会構築に寄与することは間違いないだろ。

真の循環型社会実現には  
全国民の参画が不可欠

フジコーコーポレーション 社長

山口 幸男氏

眞の循環型社会実現を  
求められている中で、「排  
出側が昔のような次元に  
戻つてしまつたような感  
じがしている」と山口幸  
男社長は話す。現在は経  
済情勢の悪化などから、  
委託先について「安けれ  
ば良い」という考え方のも  
と、適正処理の確かな根

ことになるか、その市町村の担当者の意識やレベルにも地域によって差が出ている。「その結果が市民に対し環境ビジネスの信頼性を勝ち取ることができない一つの要因になっている」状況だ。過去違法行為があつたか、地域との信頼関係を築いて

再生能源別CO<sub>2</sub>排出量を背負つていくことになる。その大きなものの一つがCO<sub>2</sub>だ。同社は最終処分場の中で受け入れた廃棄物を全量リサイクルする「フジ式循環システム」を確立しているが、再生方法別CO<sub>2</sub>排出量はいかにいわれても国民一人ひとりが大きな負荷を背負つていくことになる。

材料の全量をリサイクルし、再生品のトレーサビリティを100%確保している。処分場内という限られた範囲で使用するため、再生品に万が一の欠陥があったとしても問題が発生しない。「法律がこうだからいい」という問題ではない。多くの排出

する「生活と環境全国大会」の展示部門に出演大きな注目を集めた。今年仙台市で開催される大年会でも出展する計画だ。

「排出側は何が一番環境負荷がかからず、100%再生でき、さらに再生品の需要があるかなど、すべての根拠を持つた上で工法、業者を選択しなければならない。一方処理側は100%再生できる廃棄物のみを受ける

処理料金については予想を上回る価格下落となつた。処理量は前年に比べ、容量で6～7%、重量で14～15%増えている。これは取り扱っている廃棄物の組成が変化してきたためだ。新築系廃棄物であれば重量が軽く設備負荷も比較的少ないが、再開発などから出る地中に埋まっていた廃棄物を扱うと、どうしても重いものが増える。処理量が増えた分、業績も上がるのが

先を見据えた近未来型に事業モデルを変革起こし産廃を、できるだけ効率的に土砂と廃棄物に分別し、リサイクルを可能にするための施設だ。掘り起こし産廃は再開発現場の増加に伴い増加傾向にあり、当社としては積極的に対応すべきと考えている

——重点方針とは。

ユーシヨンができる『総合環境企業』を目指すということだ。これに対する経営基盤、将来の成長基盤を確保、広げていくことに注力している。具体的にはM&A、グループ化、同業者や動脈産業との提携などを通じてリサイクル企業集団としての

ないだろう。より顧客に密着しサービスを強化することに取り組んだ。具体的には、営業部隊を顧客別、地域別などに細分化し、同時に、営業マンと物流スタッフを一体化するユニット化を実施、できる体制にした。

ターやリサイクル、は第2世代の中間処理場だ。平成の初めに小規模な工場をいくつ持っていたが、それから容、分別して適正化するという概念の工場運転した。しかし、資源循環のためのリサイクルラインを持たない第

「3Kの代  
表と言われる  
仕事ではある  
が、地球環境  
保全に貢献し  
てているといふ  
誇りとモチベ  
ーションを持つ  
て業務に取り組んでほ  
しい。廃棄物を適正処理  
し再資源化に注力するこ  
とで、微力ではあるが社  
会の役に立っている。い  
わば地球環境のクリーン  
産業だ。我々の仕事は5  
年後、100年後の子供  
たちのためになつていろ  
と確信している」

―― 昨年社長に就任したが。  
「社長に就任して半年経過したが、めまぐるしく過ぎた半年間だった。昨年は年初から厳しい環境を予想していたところ、その通りの年になつた。

自然だが、価格の下落が大きく影響し減益となつた  
——掘り起こし産廃の専用棟が稼働したが。  
「川崎リサイクルセンターに掘り起こし産廃の専用処理棟を建設、昨年2月から稼働した。来年

「一つは中長期に対応するものの考え方、2つ目は短期的に厳しい経営環境にどう対応するかということから、3つの重点方針を打ち出し取り組んでいる。第1に『基本戦略の加速』を掲げた。

基盤を構築していくことで、これらの取り組みを加速させた。JFEグループとの資本業務提携などもその一環だ。

3つ目の重点方針は  
『新たな担い手の育成』  
だ。足元、中長期的ななど  
様々な課題がある中で  
それを取り組んでいくべき  
人材をいかに早く育成  
していくかが重要だ

A black and white portrait photograph of Dr. Kuniaki Matsubara. He is a middle-aged man with dark hair, wearing glasses, a dark suit jacket, a white shirt, and a patterned tie. The photo is set against a plain, light-colored background.

タケエイ社長

山口 仁司 氏

代の工場では、将来の社会ニーズに応えられないということで、リサイクル企業への足場を築こうと開設したのが川崎やピアだ。

# 2011年 我が社のビジネス戦略